

【近況活動報告】

日頃の活動状況を報告・紹介する機会があまりないので、新チーム発足から秋季練習までを振り返ってみることにする。

〔新チームスタート〕

高校野球は、7月にある夏の大会（甲子園予選）に敗退すると3年生は引退し、2年生を中心とした新チームが発足する。今年の夏は初戦敗退であったため、例年より少し早く新チームが始動。前チームよりレギュラーだった捕手の久田を主将に指名。部員が増えたため副将を2名体制（淡野・山田）にした。新チームになると、まずは部内の係分担を決め、選手それぞれが何かしらの係につく。係を縦割りに捉え、他の係のことは知らない、手伝わないといった我が部の悪習を絶つべく、この代から7つの係を半月のローテーションで回すことに。スケジュール係、ボール係、マシン係、救急箱係、用具係、スコア係、飲み物係、それぞれに3～4名配置。半年後にはローテーションが回りきり、部の係を選手全員が理解し、協力し合えることを期待しての変更である。また、新チーム発足時に監督より選手へ今年の指針、キーワードなどを示し、それをヒントに新主将が中心となって選手のみで今年のチームスローガンを考える。1週間の話し合いの末、今年のチームスローガンは、「勝利のために自分が変わればチームが変わる」に決定した。自分たちで決めたチームスローガンのもと、新チームはスタートした。

恒例の長野県伊那市での夏合宿を行い、帰京後は猛暑の中オープン戦をこなしていく。2年が16名、1年が12名とここ数年では一番部員数が多いので、例年以上にオープン戦を組んでおいた。前チームより主力で活躍していた選手が多い今年のチームは、新チームにありがちなサインミスやエラーが少なく、オープン戦は比較的安定したゲームを展開できていた。8月中旬のオープン戦5連勝は過去に記憶がない。そのままの勢いで挑戦した安田学園戦は、相手の雰囲気にもまれ2対6で完敗。秋季大会のメンバーは、初めての試みであるが選手間投票によりメンバーを決定。満票で選出された者、競い合って選出された者など、部員同士お互いがどう評価されているか、それぞれの自覚が芽生え始めて秋季大会へ挑むことになった。秋季大会の結果はHP 試合結果に掲載しているとおり。試合経験の多さで夏から秋季大会までのゲームは安定していたが、安田学園や明大中野など選手個々の力勝負になると学習院のひ弱さは否めない。来年の夏の大会までに、個々のレベルアップ、パワーアップが課題として残った。

〔秋季練習・野球ノート〕

秋季大会敗退後、これも例年同様であるが、秋の練習は内容を一新することになっている。新チーム発足から夏休み期間は、学校職員である私の業務も一段落しチームに帯同する時間を長く取ることができるので、規律、身だしなみ、挨拶・返事の徹底、気遣い心配りなど、1年間のチーム運営に必要な個々の野球への姿勢を徹底的に指導している。野球指導というより半分は生活指導といった具合であるのだが、秋の練習テーマは一転して、「自分で考える」ことに方針を変更している。夏休み中に部員たちは監督・コーチに言われれば気付く・動け

るようになるのだが、逆に言えば、言われなければ気付けない、動けない。自分で考えることをテーマに、例年同様、バッテリー班、内野班、外野班に班別ノートを送り、練習メニューを選手同士で決定させることにしている。全体練習が必要なのか、班別の守備練習が必要なのか、個々の自主練習の時間を多く取ることが必要なのかなど、私が就任してからの3年間、秋になると毎年書かせてきた歴代の先輩たちの班別ノートを参考にしながら、選手たちは自らメニューを考えていく。監督もコーチもミーティングには参加せず、班別のノートを毎週交換日記。「計画し、実行・行動し、反省し、また計画する」諸先輩たちが書き残してきたフレーズを大切に、自分たちで考えることを実践していく。また、今年は個人の野球ノートも配付することにした。1週間の内容をコンパクトにまとめた野球ノートを選手へ配付し、バッテリーは監督と、内野は朝香コーチと、外野は林コーチとそれぞれ毎週交換日記。この班別ノートと個人ノートはとても面白い。毎年そうなのであるが、部員たちは最初は野球ノートを書けないところから始まる。「今日～した」で終わるノートが大半である。「～した」だけでは、何も考えていないのである。練習をしているときに何を考えていたのか？その練習を行ってどう思ったのか、何を感じたのか？今日の反省は？明日の自分はどのようにありたいのか？明日のメニューに対する心構えは？など、反省し、計画し、行動することの意義を、ノートを交換しながら理解させていく。面白いもので、1週間2週間と続けていくうちに、ノートの字がどんどん小さくなり、自分の考え、思いをびっしり書いてくる者が現れ始める。その選手のノートを見本で示すと選手たちは競うようにノートを書き出す。捕る、投げることについてポイントを絞り、深く考え始める。手首の角度や、力の入れ具合、足の動かし方など、1つのプレーを細かく分析し、自分なりに考えてノートに書き残してくる。最初は、誤字の訂正や、もっと書けるんじゃないの？という返信ノートばかりなのだが、10月を過ぎるとノートの内容がどんどん濃くなっていくのである（中には、ずっと内容の薄い者もちらほらいるが。。。）。またこれも毎年実感するのだが、ノートをしっかり書ける選手は、野球もどんどん上手くなる。自らが考え始め、気づき始めるので、1つアドバイスをすると、それを理解しようとまた考えスポンジのようにアドバイスを吸収していく。ノートを書くのに何時間かかっているのやら心配になるくらいしっかり書いてくる。ご家庭では、さぞ勉強しているように見えたのではないだろうか、、授業のノートも同じくらい真面目に取り組んで欲しいものである。

〔秋季練習・バッティング・ピッチング〕

また、選手に練習メニューは決めさせているが、バッティング・ピッチングについては、ある程度こちらからテーマを与えている。バッティングについては、明大中野戦で痛感したパワー不足を克服すべく、フォームを大きくし、フルスイングOKのパワーバッティングの導入。秋の練習は春のシーズンまで時間があるので、ある程度フォームを崩しても良い。1つの型にはめたままにするのではなく、バッティングの可能性を引き出したい。秋季大会まではチームバッティングが優先され、低く強くコンパクトに打ち返してきたのだが、この秋季練習ではとにかく強く打ち返すことをテーマに。フルスイング、多少のオーバースイングも構わない、秋に力負けしてしまったインパクトを強くすることを徹底した。結果として、今までホームランを打ったことのない秋は控え選手だった2年の村松が慶応志木戦で見事な

ホームランを放ち、久田は中大付戦で、2年の安西、1年の松田は県立船橋戦でそれぞれホームランを記録した。また、投手については、それぞれ課題が異なるので、ピッチングフォームを大きくし球威を上げることをテーマにしたり、フォームを安定させることをテーマにしたり、交換日記をする中で、それぞれが自分の課題とするテーマに向き合い、練習に取り組んだ。特に秋季大会は2番手投手だった2年網干の成長は見事であった。網干は新チームになってからサイドスローへピッチングフォームを変更したので、この秋はフォームを安定させることをテーマにした。彼のノートは素晴らしく、バッテリー班の中で一番細かく自分のフォームを分析し、体重移動、足の付き方、ヒップファーストなど、こちらが指導することを全てノートに記し、どんどん成長し、秋の最後には安定したフォームの中で、お辞儀しがちだったストレートが、回転数の多い伸び上がるストレートになったのである。たいしたものだ。

〔秋季オープン戦〕

秋のオープン戦は、11月初旬、文化祭の代休を利用し千葉の成田高校へ練習試合をお願いした。安田学園や明大中野を経験できたのだが、さらにその上に位置する甲子園レベルのチームに胸を借りること。お昼過ぎに成田高校へ乗り込み、成田高校のグラウンドをお借りして対戦で失礼のないよう猛ノック。放課後、先方の授業が終わるのを待ってゲーム開始。ありがたいことにある程度レギュラーメンバーを出してきてくれた。投手は3番手クラスであるが、130キロ台のストレートをアウトコース低めに集める。打者は皆コンパクトに振りきり、初回からガンガン打ちのめされる。とにかく1番から9番まで足が速い。このスピードを体感させたくて試合を組んだのだが、予想通り、内野の1つのファンブルで一塁は全てセーフ。打ってから4秒以内に全員が一塁を駆け抜ける。全ての打球を4秒以内でアウトにしなければ、このレベルでは試合にならない。盗塁も決められ、圧巻は2塁から3塁へのタッチアップ。浅いライトフライも全てタッチアップされてしまう。2塁にランナーがいれば、ワンヒットで全て生還。あの脚力が甲子園に出場するレベルなのだと実感した。残念ながら日暮れが早く、ナイター照明でもボールが見えにくくなってしまったので5回で終了。こちらは3番久田のスリーベースヒットで1点を取るのがやっと。あっという間に点を重ねられ1対7。コールド負け寸前であった。試合後は成田高校のトレーニングを見学し帰ってきた。整頓された用具倉庫、お昼に学習院が到着したときにはライン引きなど全て済ませてある準備の徹底、授業終了後教室から走ってグラウンドへ来て5分も経たずに着替える成田の選手たちの野球に対する姿勢を目のあたりにし、うちの選手たちは新たな目標を持つことができたのではないだろうか。

〔秋季所感〕

この秋はチーム全体を見渡すと、個々の練習メニューに時間を割いたため、少しバランスを欠いてしまった。これもまた例年同様である。強く打ちたい、練習どおりにしっかり捕りたい、など個々の思いが強くてしてしまうので、返ってチームのまとまりを保つのは難しい。しかし、個の力を最大限伸ばすことが秋のテーマであったので試合の内容や結果はある程度我慢するところ。選手一人一人が野球と向き合い、野球をもっと深く考えられるようになったことが秋の収穫であり、この考えられるようになった頭のままで、冬のトレーニングを充

実させていければと思う。冬のトレーニングも、歴代のOBの記録が残っている。30M走、3000M走など歴代の記録を塗り替えられるよう努力を重ねて欲しいものである。春先にまた千葉の強豪校とオープン戦を組んでもらうことができた。成田高校戦のようなレベルの高さに圧倒されて試合が終わってしまう失敗を繰り返さないよう、冬の間をしっかり準備を進めていきたい。

（余談 冬のトレーニングは、OBたちにとって思い出深いものなのか懐かしいようで、何人かのOBはこの冬練習に参加している。走るコースやトレーニングメニュー構成はさほど変えていない。OB諸君、いつでも練習参加して良いですよ。）

最後に、日頃より高等科野球部に多大なるご支援・ご声援をいただいている、現役選手のご父母の皆様、OB会の皆様、卒業生のご父母の皆様へ、一年間の感謝の気持ちを込めてこの場をお借りして御礼を申し上げます。今年一年どうもありがとうございました。来年も選手と共に良い結果を残せるよう精一杯頑張っまいります。引き続きご支援・ご声援くださいますよう宜しくお願い申し上げます。皆様健康で良い新年を迎えられますようお祈りいたします。

以 上